

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

常識の非常識化／非常識の常識化

海老澤 栄 一

水は高いところから低いところへ流れる、が常識である。しかし時に低いところから高いところへ逆流することがある。アマゾン流域で定期的にみられるポロロッカはその典型であろう。最初は海から静かに河口に入り、徐々に水位を上げながら時に狂ったように渦巻き、根こそぎ木々を打ち倒しながら上流に向かって荒々しくわが物顔で通りすぎていく。新たな秩序形成のきっかけを造りながら…。

ポロロッカまでいなくても、「五風十雨」の言葉にもその意図が組み込まれている。五日ごとに一度風が吹き、十日ごとに一度雨が降ることが天候を順当にし、世の中を太平にするのに欠かせないという訓話である。

都民の水がめの1つ、所沢市にある山口貯水池には都知事の記念碑が建っている。その碑文のなかに「五風十雨のたたずまい」が刻まれている。また最近ある雑誌に掲載された記事に、山梨県北杜市白州町の本村耕地にある農場で「五風十雨農場」という自給自足社会の経営が紹介されていた。

ここでの晴天と風雨の関係は、「逆も真なり」とか「清濁併せ呑む」、「保守と革新」のような表現と何が常識で何が非常識なのかという点では、同じ土俵の話題なのかもしれない。砂漠化のスピードが衰えをみせないアメリカの農業、ネパールやモンゴルで後退し続ける氷河、酸性雨で“丸坊主”になった木々などは、今世紀に入ってその不可逆的な歩みを加速化しているようである。

われわれに成しうることは、ごく些細なこ

とであっても個々の構成員が気づいたところから、発信、連動、共鳴させることではないであろうか。国際経営研究所で昨年度新たにスタートしたレフリーつき公募論文集発刊の試みも、これまでの研究所の常識や秩序に警鐘を鳴らしているのかもしれない。つまり高次元での常識や秩序形成のために必要な、手前段階での非常識や無秩序生成行動とみることができよう。

ひとつ言えることは、自分の役割を細かく勝手に切り刻んで部分化しないことである。デュエルゲームのいう社会的連帯、つまり有機的連帯を意識した分業を1つの機能としてもつことをそれぞれの構成員が心がけてはどうであろうか。常識も非常識もお互いに存在することをまず認めて、それぞれ固有の機能を尊重し合い連帯することの試みである。

ロングセラーになっている話題の書『サーバント・リーダーシップ』のなかに、社会にとって真の敵は能力があるのにそれを発揮しないことである、という件(くだり)がある。言い得て妙である。

国際経営研究所の社会的役割はどのように変質、進化していくのであろうか。その真価が問われる時期が今、きているように思われる。新規企画の話題をテーブルに載せ、議論しながら常識の非常識化か非常識の常識化か、それとも両者の混合なのか、挑戦してみるのも面白いかもしれない。

創造性には危険が必然的に伴う。その危険にあえて挑戦することで、何か新基軸が期待できそうである。全員参画型で是非、まず第一歩を。

(所長／えびざわ・えいいち)

マネジメント・ジャーナル第一号の発行

研究所は20周年記念事業の一環として、新しい査読論文ジャーナルを発行することになりました。テーマは経営学に関する理論的、実証的研究で、2008年12月12日を提出期限とし、学内から6本、学外から5本、計11本の論文投稿がありました。各論文は2名の匿名査読委員による厳正な審査をもとに、編集委員会が掲載の可否を決定しました。

経営学部からは、海老澤栄一教授、行川一郎教授、後藤伸教授、林悦子教授、榊原貞雄教授、小島大徳准教授の6名、学外から7名の審査委員による厳正な審査、および審査コメントに対しての内容訂正をへて、最終的に9本の論文が受理されました。9本のうち、3本が研究論文、6本が研究ノートとして掲載されることとなりました。

掲載論文の著者とタイトルは：①中田行彦「なにがビジネス・アークテクチャの方向を決めるのか？—液晶、半導体、太陽電池の比較研究から—」、②平松茂実「モジュラー・オープン化時代と新しいグローバル化経営戦略モデル」、③田中美和「先端技術保有型金型メーカーにおける経営戦略」、④明山健師「EUにおけるコーポレート・ガバナンス統一への道」、⑤宣京哲「中国におけるコーポレート・ガバナンスと企業督導システム」、⑥青木崇「日本企業の経営理念と社会的責任活動」、⑦李振坤「中国消費者のエコ購買行動意図の規定要因と感情の役割」、⑧船山宜宏「ホイッスルブローイングとコーポレート・ガバナンス」、⑨山口貴嗣「コーポレート・ガバナンスとアドバイザー・ボード」です。

このジャーナルは学内外の若手研究者の育成と、優秀な大学院生への研究結果発表の舞台を提供することを主な目的としております。2009年3月発行目標として、研究所主体で発行準備を進めた関係で、経営学部全体への

新ジャーナルの情報開示が不十分であったことをお詫びいたします。この新ジャーナルが成功すれば、経営学発展へ大いなる貢献になる可能性があります。海老澤栄一新研究所長のリーダーシップのもと、次のステージへ発展することを期待いたします。

所長としての2年間

国際経営研究所所長としての2年間の任期が無事終了しました。研究所常任委員の石積教授、小島准教授、奥邨准教授、木村准教授のご協力に感謝します。常任委員会のメンバー外では松岡教授の貢献に感謝いたします。研究所ではフォーラム講演会を毎年開催していますが、2007年度の徳島県上勝町長、笠松氏による「究極のごみゼロ社会を目指して：葉っぱビジネスから地球環境への挑戦」、2008年度の株式会社ミセスリビング代表取締役の宇津崎光代氏による「建築で世直しをしたい」の両講演会の講演交渉、講演準備、協賛団体依頼等に松岡教授の献身的な貢献がありました。

また研究所による新ジャーナル(マネジメント・ジャーナル)の発行準備には小島准教授の貢献に感謝いたします。ジャーナルの募集要項の作成、約200大学への要項の送付、内・外部研究者への論文審査依頼、印刷会社との交渉等ほぼすべて小島准教授の貢献でした。

最後に研究所事務局の川崎さんに感謝いたします。川崎さんからは何度も研究所運営に関して貴重なアドバイスをいただき、またフォーラム講演会の準備に勤務時間外の貢献をしていただきました。湘南ひらつかキャンパスの多くの事務局の皆様にも、フォーラム講演会参加という形でご協力をいただきました。ありがとうございました。

(2007-2008年度所長 榊原貞雄)

私的回顧：2008年

2008年、神奈川大学に転勤して、2年目の年。日本や世界にとってだけでなく、小さなわが家にとっても、疾風怒濤の1年だった。

年明けも早々、長年の過労と心労からか、とうとう体が悲鳴をあげ、入院、そして手術。頼りない大黒柱だが、家族にとって私が倒れたことはショックだった。その後も病状は回復せず、2月に再入院、そして再手術。2度の手術も効果なく、結局は薬物治療を続けるしかなかった。副作用が起るかもしれない薬、これから一生お世話になるかと思うと気が重くなる。だが、命あつての物種。3月末まで自宅療養をしながら、内外の雑務をこなす。

4月、新学期スタート。はたして、こんな体で授業に耐えうるのか心配だったが、薬のおかげか、しばらくしたら授業中の動悸もなくなり、ひと安心。そうこうしていると、今度は母の状態が急激に悪化して、在宅介護をすることに。

母は5年前に末期癌と宣告され、2度の開腹手術ときつい抗がん剤治療に耐え、なんとか命を保つことができた。ところが、2006年2月に母の介護をしている父が亡くなると、その寂しさからか、癌が再発。悔しいことに、抗がん剤が届かない脳に転移。母は恐怖に耐えて、開頭手術に挑み、その後放射線治療。その結果、手足のまひだけでなく、認知症の症状があらわれるようになった。兄夫婦による没我の介護。そして、昨年、完全に寝たきり状態に。座ることさえできない老婆を受け入れてくる施設は少ない。6月、やむなく、訪問医師と介護ヘルパーさんたちの力にすがって、横浜のわが家での在宅介護に切り替えた。

このとき、私の健康云々を心配しているような状態ではなかった。まさに、家族総出の介護。それでも手が足りず、とうとう7月には兄夫婦も合流して、奇妙な同居生活がスタート。家族全員が力をあわせて心をひとつにして介護をするも、と

貴志俊彦

うとう力がついて母世界。偉大でありながら、愛嬌のある母だった。その直後に、共同研究の成果である『資料で読む世界の8月15日』（山川出版社）が刊行され、墓前に捧げた。

自宅介護の際にも体調はときおり悪化。母が亡くなって、魂がぬけたような状態になり、また体を休めるためもあって、8月はTVで北京オリンピックを見続けた。書家であった母を西安に連れて行くことさえできなかったことが悲しくてしかなかった。なんのために中国語を学んだのか。TVの画面を見ながらも、戦後孤児になった母が、これまで家族を守り、育てるために、どれほどの苦勞をしてきたか、頭がよぎる。

2008年の前半は、こうしてまたたく間に過ぎ去った。夏に、貴志科研で企画していたオランダの

ライデン大学や、ウラジオストクの極東大学でのワークショップも、すべて参加できず、他のメンバーにお任せした。夏の終わりに、共同編集をし

ていた『アジア遊学』113（地域情報学の創出）が出されたのが気休めになった。

私を一貫して励ましてくれたのは家族、研究仲間、そして高校や大学の同窓生たち。2008年ほど、家族や友人のありがたさを感じた1年はなかったように思う。みなに支えられて、9月末から研究を細々と再開。国際書院と東大出版会から刊行される共同研究成果を編集する作業から始めた。前者は、この2月に『文化冷戦の時代—アメリカとアジア—』（国際書院）として刊行。後者は、5月頃に刊行予定。

海外に行くのが怖かったが、研究仲間のサポートもあって、12月初旬にハノイ工科大学で発表、月末には上海社会科学院でも。

人生、計画どおりにいかないよ、と天の声。そよ風とともに健康一番という母の声。息子が結婚するまで、お酒を絶つことにした……。

(所員/きし・としひこ)

研究余滴

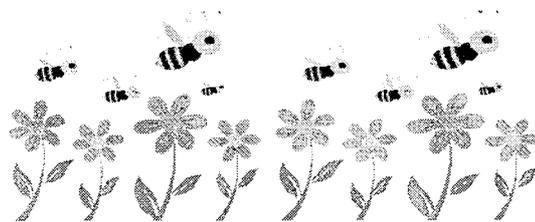
新年度国際経営研究所主な活動予定

1. 所員会議
 - ・年2回
2. 常任委員会
 - ・年10回
3. 出版広報活動
 - ① 『国際経営フォーラム』年1回
 - ② *Management Journal* annual
上記2雑誌の棲み分け以下のとおり
 - ①は所員対象の論集
 - ②は昨年度新規発行、主として公募、レフ
リーつき論集
 - ③ プロジェクト・ペーパー
共同研究の成果報告書、年3号発行予定
 - ④ 「国経研だより」年4回
研究所の活動成果、所員のエッセイ中心に
時系列的に発行、広報の役割
 - ⑤ 研究所案内英文リーフレット、biannual
4. 研究支援活動
 - ① プロジェクト研究
戦略的使命をもつ特別プロジェクト
 - ② 共同研究
6本の共同研究に研究支援
 - ③ 研究奨励
法人奨励研究
 - ④ 外部資金研究
外部機関の研究助成を得た委託研究
5. 学部内連携活動
 - ① 国際経営学会活動支援
 - ② インターゼミナール大会広報支援
 - ③ 実社会体験研究広報支援
 - ④ 国際交流広報支援
 - ⑤ 外国語スピーチ大会広報支援
6. 学内連携活動
 - ① 産官学連携推進
 - ② 総合理学研究所活動支援
 - ③ 経済貿易研究所活動支援
 - ④ フロンティアクラブ活動支援
 - ⑤ 神奈川大学 KU ポートスクエア主催エ
クステンション講座支援

7. 地域連携活動
 - ① 平塚市、秦野市、平塚商工会議所、同中
小企業相談所、茅ヶ崎市、同商工会議所、
横浜商工会議所、
 - ② 神奈川県中小企業センター
 - ③ 湘南地域産業振興協議会
8. 公開講演会
学部講義と連動する形での講演会の広報支援
9. 講演会企画・支援活動
 - ① 講演会企画
各種国際経営フォーラム講演会、シンポジ
ウムの企画開催
 - ② 平塚商工会議所中小企業相談所
経営革新講座：シンポジウム企画支援
10. 国際交流活動
韓国：東西大学校アジア研究センターとの共
同シンポジウム開催
11. その他活動
平塚商工会議所の支援を得て地元経営管理者
との経営革新講座開催

新年度国際経営研究所の構成員

所 長	海老澤 栄一
常任委員	奥邨 弘司／木村 章男／ 小島 大徳／林 悦子
所 員	42
特任教員	3
客員研究員	8
総 員	58名



ミツバチが原因不明で激減しており、アメリカでも日本でも花の受粉に大きな支障がでているようです。かぼちゃ、なす、うりなどの野菜がいつまで口に入るか、養蜂家、農家の未来は、生態系は、という国際経営の問題がすぐ目の前に。重い課題を担ってスタートしました。ご支援よろしく。(E)